

Tell me, maestro

マエストロに聞く

山下理絵

YAMASHITA Rie

湘南藤沢形成外科クリニックR総院長



肝斑治療の変遷と レーザートーニングの テクニック

かつては肝斑にレーザー治療は禁忌とされたが、「レーザートーニング」という治療法が開発されたことで肝斑の有効な治療法の1つと考えられるようになった。今回は、シミの定義が確立していない頃から肝斑治療に向き合ってきた山下理絵先生に、これまでの肝斑治療の変遷、肝斑に対するレーザートーニングのテクニック、そして合併症を引き起こさないための注意点などについてうかがった。

黎明期のシミ治療

山下先生がシミの治療を始めたのはいつ頃ですか。

初めてシミを診察したのは大学病院の研修医時代です。シミの除去を希望する患者さんが受診すると、周囲は男性医師ばかりだったこともあり、私に担当が回ってきました。当時はまだシミの概念も確立していませんでしたから、さまざまな種類のシミがあることすら知らずに診察していました。治療法もまだなかっ

たため、患者さんには診察だけ受けてもらい帰っていただいていた。本格的にシミの治療に取り組んだのは、1994年に湘南鎌倉総合病院に異動してからです。

その頃はシミに対してどのような治療をされていましたか。

ちょうど日本でレーザー治療が始まった時期で、ルビーレーザーが扁平母斑や老人性色素斑の治療に効果を上げ、太田母斑の治療にQスイッチルビーレーザーが使われるように

なった頃でした。そこで私も、シミがQスイッチルビーレーザーで治せないかと考え、老人性色素斑に試してみました。しかし、約半数に炎症後色素沈着(postinflammatory hyperpigmentation ; PIH)が起ってしまい、肝斑に使ってみても、再発と増悪をくり返して効果は不十分でした。

さらにその頃、Selective photothermolysisの概念を確立した「レーザー界の神様」RR AndersonがQスイッチルビーレーザーによる臨床成